

近江上布のユニークな型紙に魅せられ その模様を身に付け、あそぶモノへ。

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催:LEXUS)が、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト/アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠と匠研究所)らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェア一家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。



1月24日、プレゼンテーションにて

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援



プレゼンの様子

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイターの匠と、世界的クリエイター(コラボレーター)が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏(建築家)、廣川玉枝氏(SOMARIAクリエイティブディレクター)、森永邦彦氏(MAREALAGE/代表取締役社長・デザイナー)、辰野

しずか氏(クリエイティブディレクター/プロダクトデザイナー)が登場し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。

「伝統を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力が「世界」へ広く発信する。

LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。滋賀県選出の匠、型紙雑貨デザイナー・あそびクリエイターの関りんさんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

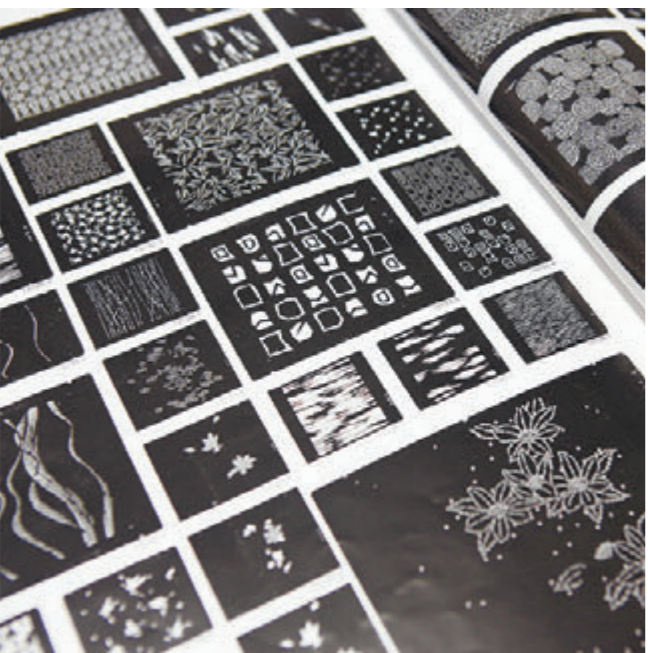
広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。



大胆かつ繊細な野々捨商店の型紙模様

町の文化財を手にとって親しめる形に

小箱を開ければ、ちょっとした図形が並んでいる。取り出して付属の金具またはチェーンにつけると、イヤリングやネックレスになる。組み合わせる形と数は自由自在、気分やTPOによって好きな形のアクセサリを自分で作れるのが「の」のすてジュエリーボックスだ。形もネーミングも不思議だが、「の」のすてことは滋賀県愛荘町にあった「野々捨商店」に由来する。



格子戸が風情を醸す工房

型紙雑貨デザイナーの関さんが活動拠点にしている愛荘町を含む湖東地域は、型紙を用いて先染めした麻糸を緋の技法で織り上げる近江上布の産地である。現在も近江の伝統工芸品として数軒は操業しているが、野々捨商店は惜しくも2002年に廃業してしまっただけで、実際に使用していた型紙約6千枚は、愛荘町へ寄贈されたという。

大学で「遊び」を研究課題としていた関さんは、卒業後に地域おこし協力隊として愛荘町へ移住する。「役場で見せられた型紙は、昭和初期に考案されたにもかかわらず斬



サポートメンバーの生駒氏と

新でモダンでした。この面白い模様を資料として残すだけではもったいない、町の歴史が息づく型紙を身近に親しめる形にできないだろうか…。そんなときにおりがみを業しむ町民と出会い、型紙をおりがみにすれば、模様と形が新たな展開を見せるのではないかと考えたんです」と、関さん。

こうして誕生したのが「の」のすておりがみであり、次いでレターセットや扇子を商品化してきた。これらは琵琶湖の水質保全に役立つヨシを含んだ紙に模様を印刷。おりがみは地元で折り方のワークショップを開くなど、地域性とエコロジーも意識した商品になっている。

平面から立体へ、そして組み立てる面白さを

関さんは協力隊の任期が終了しても愛荘町に留まり、型紙の可能性を追求し続けてい



旧中山道愛知川宿にほど近い



平面の型紙模様を立体化することにチャレンジ

関りん 滋賀/型紙雑貨デザイナー
あそびクリエイター

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」では型紙の模様一つ一つの形をクローズアップさせようと思いましたが、そして紙でない素材へ、平面から立体へ挑戦しようと考えた結果、最初に候補としたのが積み木でした」と語る。不思議な形が立体になり、それを自分で組み合わせて違う形を作る、つまり「使える立体」はどうかと思い至ったのだ。ところが試作してみると、いくつかの困難が待ち構えていた。子どもが遊ぶときの安全な形やサイズの設定、くり抜いた木の耐久性、硬度の高い県産木材の調達方法、工作機械を使える環境、などなど。悩む関さんに、生駒氏から「平面から立体へ」という発想はとても良い。それなら身に付けるものを考えてみては?」とのアドバイスがあり、アクセサリという新たな方向が見えたのだ。



独特の形を重ねて遊ぶことができる「の」のすてジュエリーボックス」

模様を積み重ねる楽しさが体感できるプロダクト

当初は木材を考えたが、自在に形を切り出せるレーザー



関りん
滋賀/型紙雑貨デザイナー・あそびクリエイター

1989年生まれ。大学在学中に「あそび」を研究する。2014年より滋賀県愛荘町地域おこし協力隊として活動。町内で操業していた機屋「野々捨商店」の近江上布の型紙の模様を活用した「の」のすてプロジェクトを展開。2016年にりんりん制作事ム所を立ち上げ、代表旗振り役をつとめる。



型紙をもとにした試作品の数々

LEXUS
NEW
TAKUMI
PROJECT